
“ 神様 ” の苦悩

メネ@分家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“ 神様 ” の苦悩

【Nコード】

N 2 2 5 0 U

【作者名】

メネ@分家

【あらすじ】

ある普通の少年は塾の帰り道、ふとしたことで乗用車に轢かれてしまう。「助けてくれ」と願うと、本当に神様が助けてくれて——。というお話。ファンタジーではありません。

ふと空を見上げると、星がきれいに光っていた。今は夏だから、瞬いているように見えるのは視力のせいだろう。塾で勉強している間は眼鏡を掛けていたが、終わったらすぐに外すようにしている。眼鏡歴の浅い自分は、まだ鼻にかかる重さに慣れていなかった。

デパートの前に多くの人が集まっていた、とても窮屈だ。ああ、そういえば今日は開店セールだったなあと、鼻腔の中で刺激してくる塗料の臭いを感じながら思い出す。別にそれ自体は興味ないが、入口付近で人混みが出来上がるというのは無視しきれない。目的の横断歩道まで直線五メートル以内にもかかわらず、雑踏のせいで上手く進めない。並んでる客から「コイツ邪魔だなあ」と思われているのだろうが、こつちだって「この人たち邪魔だな」と思っているからおあいこ、なんて多数決社会においては通用しないけれど。

ようやく群衆の山から抜け出してハツと前を見れば、歩行者用信号機の青色が点滅していた。慌てて歩道の縞模様を駆けていく。この信号は待ち時間が長く、逃すと無益な時間を掛けることになってしまう。早く家に帰り、勉強によって酷使した脳を休めたかった。ちようど歩道の真ん中を通り過ぎるとき、隣から車のクラクシヨンが聞こえてきた。早く渡りきらないと迷惑になッ

っあ、

え、……痛、い？

頭がかち割れたんじゃないかと疑うほどの衝撃が、インターホンを鳴らさずにかずかとやってくる。痛みで手を動かすことすらできない。自分が今どこにいてどんな姿をしているかが想像できず、重力がはたっているのかも解らず、自分の周りには痛みと熱しかないのではないかという錯覚すら覚える。

周囲からざわめきが聞こえてくるが、それが頭に響いてガンガン

と痛んだ。黙ってくれ、と口にできないから野次馬の声は止まない。
なあおい、それだけいるんだったら救急車でも何でも呼んでくれ。
痛いんだよ、痛いんだ、助けてくれ、誰か――

『では助けてやろう』

唐突に聞こえてきたその声を認識した直後、世界に急速に色が戻り、……ここがさつきとは違う場所だと気付いた。続いて、先ほどまでの痛みや熱が引いていることも。

ふわふわとまるで無重力のように身体が浮き沈みする。地面がなく、壁や天井という仕切りもなく、何よりも広大な場所だった。周りの色が緑から青、青から黄、黄から紫へと変化していく。一見目に悪いようなのに、むしろ目の保養になっているようだった。

そういえば、何でここにいるんだっけ――ということを考え始め、すぐに、目の前に誰かが立っていると解る。顔はよく見えないが、驚くほど純白の布を羽織ったその姿は、後光が見えるほどに神々しかった。

「あのう、あなたはどなたですか……？」

『私か？ 私は、“神様”だ』

誇らしげに語るその姿に向かって嘘つけと言いかけたが、確かにこの空間やこの人を見ていれば、一概に否定はできなかった。出そうとした言葉を飲み込んだせいで、二の句どころか何も切り出すことができない。

しばらく何も言えないでいると、神様がゆっくりと口を開いた。

どこか哀しげというか、何かを悔やんでいるようにも見える表情だ。
『実は——そなたに、謝らねばならないことがある』

「え……?」

神様ともあるう者が、自分のような普遍的な一般人に謝ることなどあるのだろうか。よく考えれば、こうして話しかけられているということすら有り得ないのに。いやでも、もしかしたら皆も話したことがあるのかもしれない。実は神様と出会うのは普通で、今まで会っていないかった自分の方が珍しかったのか。

……ああ……。ここは気持ちというか心地がよくて、頭がぼうつとする。脳みそが甘いジャムに漬けられたみたいで、いつもなら考え付かないこともぼんやり思い浮かんできた。

そのぼんやりした脳に向けて、神様が続ける。

『そなたはつい先ほど死んだ。だがその死は、手違いだったのだ。私のミスだ、すまない』

……そうなんだ、手違いだったんだ。じゃあもしかして、お詫びに生き返らせてくれるとか、そういうものもあるのかなあ、と考えた。不思議と、間違えて死なされたことへの怒りは湧いてこなかった。

そこでだ——と、神様が切り出す。

『詫びといつては何だが。……そなたに超人的な能力を授け、異世界へと連れて行ってやろうと思う。それで許してくれまいか』

脳内で“神様”を“神”と呼び捨てるようになった瞬間だった。頭も冴え渡り、常識的な思考で物事を見られるようになった瞬間でもある。

超人的な能力なんて訳のわからない物を厚かましくくれる上、元に戻してはくれず異世界なんていう変なところに連れて行くだと。ふざけるな、と思った。思うだけでなく、その言葉は口を突いて神へと吐き出される。

「ふざけんな」

『うむ、そうだ——えっ?』

物知り顔で悠然と構えていた神はこの答えを想定していなかったらしく、恰好に似合わない素っ頓狂な声を上げた。今となっては、その狼狽すら小気味がいい。ざまあみると指差して笑ってもいい気分だ。

ああそうだ、今考えれば色々とおかしい。

神というほど完璧である者が、自慢げに自ら「神様」と自称するだろうか?

また神というほど完璧なのに、手違いを犯した拳句人を死なせるのはなぜ?

それに一番最初、「では助けてやろう」だとか上から目線すぎやしないか?

『お、おいちよつと待った。能力は欲しくないのか? 異世界に行つて人生をやり直してみたくはないのか?』

うるたえた自称神が焦った様子でべらべらと述べるが、その焦りすら怪しい。

「あのな、俺が人生に嫌気がさした自殺願望者に見えるつてのか? あんた一応神なんだろ、なんでもできるんだろ。心読むとかできないのかよ?」

『いやその、最近プライバシーとかあつてな……。じゃないそうじゃない、お前——そなた、異世界に興味はないのか?』

「異世界ってなんだよ。一帯砂漠とか一面海洋とかに連れてかれつつ死めただけだろ。興味はあるけどさ、第一どんな世界だよ」

初めの頃には持っていた敬意はもはや廃れ、密林の中で青ゴケがこびりついた骨のようになっていた。その骨をハンマーで叩いた後、産業廃棄物として捨ててやりたい。

理解できないといった様子で神が頭を大きく捻っている。もはや

後光も消えかかっていた。

『ええと――。私の言う異世界というのは、中世ヨーロッパのようなところで、綺麗なお姉さんがいっぱいいて、そなたは能力で将軍に成り上がって彼女らに惚れられて、』

「はあ……？　それ、あんたの願望だろ。俺じゃなくてあんたが行けばいいじゃないか、巻き込まないでくれよ」

『う、うう、うむ……』

「ああそうだ、もし本当にお詫びがしたいっていうなら、俺を元に戻してくれ。異世界よりもその方が百倍ありがたい。神って名乗ってるんだから、それくらいできるだろ」

『あ、え、はい。わ、分かりました……』

もう後光が無いどころか態度までしおらしくなり、“神”と呼ぶにも勿体ないほどにみすばらしかった。もしこれで「神です」と言つて、果たして信じる人はどれほどいるのだろうか。ただでさえ無神論者が多い現代では、絶滅危惧種なみに少ないかもしれない。

そんなことを適当に考えているうち、自称神がぶつぶつと念仏とも呪文ともとれる何かを唱え始めた。その恰好だけを見ると、神よりは魔術師の方が近いように見える。いや、奇術師か手品師のレベルだろうか。

やがて光が身体を包み込んで周りが何も見えなくなつて、

「い、っだ、あああ、ッ」

激痛で目が覚めた。

少年がいなくなり、“神様”だけが残った広大な空間。どこなく哀愁を漂わせている“神様”は、はあとため息を吐いた。同時に、肩もがつくりと落とす。

「また失敗した……」

呟いたその言葉があちらこちらで跳ね返り、“神様”のいるところへとそっくりそのまま返していった。耐えきれなくなったのか、両手で耳を塞ぐ。

しばらくして手を下ろし、純白の布をいそいそと脱ぎ始める“神様”。

その布の下には、Ｔシャツとジーンズという、普通の一般人が着るような服装を身に付けていた。到底“神様”とは呼べなさそうな風貌だ。

「どうしてこう、俺は失敗するのかな。ほかのみんなは簡単に成功してるのに」

反響を警戒してか、言い終わるとすぐに耳を塞いでいた。そしてまた、残響が消え去ると言葉を続けていく。

「本当、なんでかなあ……。毎回、“主人公”に断られるんだ。異世界って結構魅力的だと思うんだけど……」

頭をかきながら、“神様”は大学ノートをどこから取り出した。宙に浮かぶボールペンを引っ掴み、あるページを開くと大きくバツテンを描く。それから次のページを開いて、しばらくそのまま待った。

「次はどんな“主人公”にしようかな……。今度こそ、断られない

といいけど」

はあ、と“神様”がため息を吐く。

跳ね返ってきた自らの声に、“神様”は思わず顔をしかめた。

（後書き）

むしろエッセイの気がする。

とりあえず轢かれるところは書いて楽しかったです。

感想・批評・意見・報告などありましたら気軽にどうぞ。

（´・ω・`）メネ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2250u/>

“神様”の苦悩

2011年6月20日07時55分発行